



日本のことばと文化 **中級1**



日本のことばと文化 **中級2**

教え方の手引き

第1部

—各 PART のねらいと授業の流れ(中級 1&2)—

ver. 20171006

はじめに

この『まるごと日本のことばと文化 中級(B1) 教え方の手引き 第1部 ー各 PART のねらいと授業の流れー』は、『まるごと』中級 1、中級 2 を教える先生のためのガイドブックです。

『まるごと』は JF 日本語教育スタンダードに基づいて制作された日本語コースブックで、日本語学習の目標として、実際の場面において、日本語でコミュニケーションができることを目指しています。教材の通りに授業を進めれば、基本的にはそうした力が身につけられるように設計してありますが、これまで別の教授法、教授観で教えていた先生は、はじめはその違いに戸惑うかもしれません。そこで、誰でも『まるごと』を使った授業の進め方について、基本的な理念、注意点、具体的な授業の運びなどを理解できるように、この「教え方の手引き」を執筆しました。

『まるごと』中級 1 と中級 2 は、それぞれ 9 つのトピックから成り立っています。一つひとつのトピックは、以下のような構成になっていて、それぞれの PART は技能別の学習目標 (Can-do) を持っています。

扉／準備

PART 1: 聞いてわかる

PART 2: 会話する

PART 3: 長く話す

PART 4: 読んでわかる

PART 5: 書く

教室の外へ

この『教え方の手引き 第 1 部 ー各 PART のねらいと授業の流れー』では、これらの各 PART がどのような意図で作成され、それぞれの PART をどのように教えればいいのか、「ねらい」「進め方」「留意点」などを示しています。まずはこの手引きを読んで、『まるごと』中級 1、中級 2 を使った授業の全体の流れをつかんでください。

各トピックのそれぞれのくわしい教え方は、『教え方の手引き 第 2 部 ートピック別の教え方と留意点ー』を併せて参照してください。

国際交流基金日本語国際センター

◎ 扉／準備 (30分－60分)

<ねらい>

扉と準備の部分では、これから勉強するトピックについての背景知識を活性化し、動機付けを行うことが目的です。「こんなことが話せるようになりたい」と、学習者がトピックで「できること」のイメージを膨らせるようにします。また、そのトピックに関する語彙や表現も導入します。

<進め方と留意点>

トピックに関係した写真やポスター、WEB サイトなどと、その理解の助けとなるような質問が設けてあります。学習者の発話を引き出し、トピックへの入り口を広げることが大切になってください。また、これは「準備」ですから、あまり、時間をかけすぎないようにしてください。

① トピックについての質問 (→ 扉)

写真を見ながら、自分の経験を振り返ったり、クラスで話し合ったりします。

トピックで学習する Can-do の内容や言語使用場面に関する写真が数枚載せてあります。写真を見ながら準備された質問をヒントに、自分の経験を振り返ります。日本語で言えないことがあれば、母語や共通語を使ってもかまいません。クラスのほかの人の話を聞いて思い出したこと、その感想などについて話したり、教師が自分の経験を話したりしてもいいでしょう。

② 写真やレアリアを見る (→ 1)

コンサートのポスターや映画の DVD ジャケット、レストラン案内、マンガの表紙、駅の表示や看板などを見て、気づいたことをクラスで話し合います。

写真、ポスター、パンフレット、広告、SNS の書き込みなど、トピックに関係のあるいろいろなレアリア(実物、または実物を再現したもの)を複数載せてあります。複数用意してあるのは、たとえば日本の温泉にもいろいろな温泉があるように、バラエティに気づいてもらうためです。

これらの写真やレアリアを見るときに観点として、簡単な質問があります。この質問に答えながら、気づいたことや考えたことを自由にクラスで話し合います。教師が適宜質問を加えてもいいでしょう。トピックによっては選択肢を選ぶ形式のものもありますが、選択肢は考えるときの助けとして挙げてあるので、正答が何かにこだわる必要はありません。

なお、レアリアによっては、写真だけでなく、日本語の情報が含まれているものもありますが、情報

を細かく読み取ることがこの目的ではないので、その日本語について教師が一つひとつ解説する必要はありません。また、ここで取り上げた題材(祭りや行事、マンガ、映画など)についての情報は、『教え方の手引き 第2部 トピック別の教え方と留意点ー』に簡単な解説があるので参考にしてください。ただし、授業ですべてを説明する必要はありません。興味のある学習者にはインターネットで検索するように勧めるなど、学習者の意欲や自律性を育てるようにしましょう。

③ 文化について考える (→ 文化)

日本と自分の国を比較して、同じところや違うところは何か、それはどうしてかという背景を考えます。

1の写真やレアリアに関係のある事柄について、自国の場合はどうか、日本と同じところや違うところがあるか話し合います。また、それはどうしてなのか、その理由や背景を考えるを通して、さまざまな価値観の存在に気づき、思考し、判断する力を育てます。ここでは、日本語を使うよりも内容を深く掘り下げて考えてみるの方が大切なので、場合によっては、母語や共通語を使ってもかまいません。また、教科書にある質問だけでなく、学習者が考えるきっかけになるような質問を教師が加えてもいいでしょう。そして、ここでの活動が、あまり知らないトピックについても、好奇心や意欲を引き出すことにつながればと思います。

なお、文化についての質問は、準備だけではなく、ほかのPARTにもあることがあります。

④ 語彙や表現の確認 (→ 2)

このトピックに関係のある語彙や表現を確認します。いろいろな人がインタビューに答えているという設定です。

トピックに関係した内容のインタビューに、複数の人が答えているという設定です。()に入る語彙を選択肢から選ぶことによって、そのトピックでよく使われる語彙が学べるようになっています。内容的にもバラエティがあることを示すために、5-6人の人が登場します。

答えは、チェック音声を聞いて確認できるようになっています。わからない語彙や表現は、語彙表(まるごとサイトよりダウンロード可)を見ながら確認させたり、必要な説明を教師が加えたりしてください。ただし、ここでは与えられた文脈での意味や使い方がわかることが目的なので、練習を広げる必要はありません。

◆注意してほしい表現

このトピックについて話すときに使われる表現(赤字の部分)を整理します。たとえば、「過去/未来」「事実/希望」「理由/結果」「プラス評価/マイナス評価」のように、意味や機能の面から違いを考えさせます。B1レベルでは、さまざまな表現に出会いますし、また使える表現を増やしていくことも大切です。このとき、一つずつバラバラに覚えるのではなく、対比したり、グループ化したりすると記憶しやすいと考えられるからです。ほかにも、学習者が知っている表現や言い方があったら、

いっしょに整理してもいいですし、必要に応じて例文を教師が加えてもかまいません。

ただし、ここは準備のコーナーで、すべてをすぐに使えるようにする必要はないので、あまり、練習に時間をかけすぎないようにしてください。

⑤ その他の活動（ → 3 ）

会話場面の写真や商品広告を見たり、音楽や電車の車内アナウンスを聞いたり、マンガや映画のセリフの一部を読んだりなど、トピックに合わせていろいろな活動を行います。

PART 1-5 の背景知識を深めるために知っておいた方がいいことや、触れておくいいことを、できるだけ実際の言語使用場面に近づけて提示してあります。音楽のトピックであれば実際に音楽を聴いてみる、マンガや映画のトピックであればマンガや映画のセリフの一部をのぞいてみる、温泉のトピックであれば温泉旅館の予約サイトを見てみる、健康のトピックであれば健康食品の広告を見てみるなどです。それぞれに、簡単な質問がありますから、クラスで自由に話し合ってください。



PART1:聞いてわかる (90分–120分)

<ねらい>

このPARTの目的は、トピックに関係のあるいろいろな人の話を聞いて、だいたいの内容を理解したり、知りたい情報を聞き取ったりできるようになることです。趣味のサークルに参加して日本人の自己紹介を聞く、職場の同僚に日本料理の店を紹介してもらい、インターネットで温泉紹介番組を見る、ネットの動画ニュースを見るなど、海外でもありそうな場面を取り上げてあります。このような場面で、実際の聞き手の立場に立って、目的のある聞き取りをします。

素材の日本語は、場面や人間関係を反映させ、なるべく自然な日本語に近づけてあります。そのため、スピードが速く、話しことばの特徴が多く含まれているためにわかりにくいと感じたり、また知らない語彙や表現が多く含まれていて難しすぎると思ったり、はじめは自信をなくしてしまう学習者もいるかもしれません。しかし、教科書の「この教材の特徴」にも書きましたが、実際の場面で話される日本語を理解していく力を身につけるためには、教室でこのような経験をすることが大切です。目的は、すべてを理解できるようになることではなく、Can-do の達成、すなわちタスクになっている内容を理解することです。「わからないことがある」ということを否定的にとらえるのではなく、「わからないことがある中で必要なことを理解する」ということを肯定的にとらえてください。また、授業のオリエンテーションでは、この点について学習者に十分に説明しておくといいいでしょう。

<進め方と留意点>

このPARTでは、何回か音声を聞いて段階的に内容を理解していきます。また、タスクの内容に合わせて、毎トピック、聴解ストラテジーの練習を行います。Can-do の達成に直接かかわる練習は、**3**までです。最後に、聞いた内容をまとめる練習をしますが、これは、内容の確認だけでなく、言語形式に注目させる目的があります。

① Can-do の目標を確認する

学習目標となる Can-do を読んで確認します。

② 場面・設定の確認

イラストを見て、どんな場面で、誰の立場で、何のために聞き取ればいいのかを確認します。

このPARTの聴解場面には、大きく分けて、テレビやインターネットの動画サイトなどから一方的に

流れてくる情報を聞き取る場合と、2人以上の双方向的なやりとりに参加して必要な情報を聞き取る場合があります。後者の場合、聞き手は、関係のない人の会話を傍観者的に聞いているのではなく、会話の参加者として目的を持って聞き取りを行っているという点が重要です。

このような場面・設定の違いを踏まえ、とくに会話の場合は、どこで、誰と誰が、何について話しているかを、イラストと吹き出しのセリフから把握させます。そして、誰の立場に立って、何を聞き取ればいいのかを確認します。

③ 聞くまえに

自分の経験を思い出したり、これから聞く内容について予想したりします。

質問に答えたり、イラストや写真などを見たりして、これから聞く内容について予想します。これは、わからないことを含んだテキストを、より積極的に聞くための準備のためです。ここでの質問の目的は、できるだけ内容を予想させるためですから、イラストや写真のどんな点に注目すればいいかなど、ヒントになるような問いかけを教師が用意するといいいでしょう。

ただし、トピックによっては、先に「聞くまえに」の質問に答えたと、「場面・設定の確認」をする場合があります。この場合、聞くまえの質問は、そのトピックについて自分の体験や考えを振り返り、背景知識を活性化させる、一般的な質問になります。

④ 内容を段階的に理解する (→ 1)

わからないことを含んだテキストを目的を持って聞き、大切な内容を理解します。決められた情報だけを聞き取る、キーワードを手がかりに聞き取るなど、トピックや素材に応じていろいろな練習をします。

このPARTのCan-doの達成を確かめる主要な部分です。

1の指示文を読んで、聞く目的を確認します。タスクは、はじめに概要や要点だけを聞き取り、だんだん詳細な内容が聞き取れるように、段階的に設けてあります。ただし、詳細な内容といっても、聞いたことを全部わかることが目的ではなく、Can-do達成が目標なので、タスクができればわからないことが残っていてもかまいません。

同じ音声をくり返し聞きますが、タスクに応じて聞く目的が異なりますから、それぞれの段階で、何を聞き取ればいいのか目的をしっかりと確認し、そこに注目するような聞き方をさせてください。また、それぞれの段階でわかったことをグループやクラスで共有することによって、わかったことを確認し、わからなかったことを明らかにしてから次の段階の質問に進むようにすると、より積極的な聴解につながるでしょう。

なお、タスクが終わったあとで、わからなくて気になる箇所がある／全部理解したいという学習者のためには、スクリプト(巻末)やスクリプトの訳、語彙表(まるごとサイトよりダウンロード可)が用意されていますから、授業のあとなどに各自で確認すればいいでしょう。

⑤ 聞くための戦略（ → 2 ）

わからないことばがあったとき聞き返したり、より詳しい説明を求めたり、知らないことばを推測したり、話の展開を予測したりするなどの戦略を練習します。

B1 レベルの聴解では、わからないことがある中で、聞き手が積極的にわかることを増やしていくことが大切になります。そのために、双方向的な会話場面では「質問」「聞き返し」「確認」などの聴解戦略を、テレビやインターネット上の視聴では、内容の「予測」、未知語の「推測」などの戦略を使用します。ここでは、トピックごとに、Can-do の達成に役立つさまざまな戦略を取り上げて練習します。

これらの戦略の中には、学習者が初級段階に出会って知っているものや、すでに身につけているものもあるかもしれません。また、戦略は一度練習したからといってすぐに上手に使えるようになるものではありません。それにもかかわらず、毎回、戦略指導を練習に取り入れる目的は、戦略の意識化にあります。

練習は、多くの場合 3 段階になっています。まず初めに、1 で聞いたテキストの中で、戦略が使われていたところを確認します。戦略使用部分だけを取り出した音声を用意してありますから、それを聞いて、たとえば、「聞き返し」によってわかったことばの意味をメモするなど、戦略の機能に注目します。学習者の気づきを促すためにも、ここで行う作業は 1 の聴解活動では行わず、ここまで待っておくようにしてください。次に、もう一度、戦略使用部分の音声を聞き、聞き手がどう言っていたか（たとえば、どう聞き返していたか）、言語形式に注目します。

最後に、クラスの中で戦略を使ってみる練習がありますが、これは、取り上げる戦略の種類によってやり方が異なります。くわしくは、『教え方の手引き 第 2 部 ートピック別の教え方と留意点ー』を見てください。

⑥ 聞いたあとで（ → 3 ）

聞いた内容について自分の考えや感想を話し合います。

1 の聞く目的に対応して、聞いて理解したことについて自分がどう思ったかを簡単に話します。ここでの目的は上手に話すことではなく、学習者それぞれにとって、ここで得た情報の意味を確かめること、つまり、実際の聞き取りに近づけることです。ペアやグループなどになって、自由に話し合うことで、お互いの考えや意見の違いなどに気づくとおもしろいでしょう。

⑦ 聞いたことをまとめる

()に入る大切な語彙や表現を確認し、使えることばを増やします。

聞いて理解した内容をまとめる練習です。ここでは、理解した内容を目で見て確認するという目的と、聞いたことの中から言語形式を学ぶという目的があります。要約と言っても、簡単にできるように空所補充形式(助詞以外は選択肢あり)になっています。言語形式として注目するところは、動詞を中心とした活用形、接続表現、副詞的表現などですが、単なる形の練習ではなく、文脈の中で正しい言語形式を選べるようになることを重視してください。

空所を埋めたあと、学習者それぞれがチェック音声を聞いて、解答を確認します。時間がなければ宿題にしてもかまいません。

⑧ Can-do ができたかチェックする

巻末の「学習記録シート」に、Can-do の達成度を3段階(☆☆☆)で自己評価します。自己評価にあたっては、質問形式になっている評価のポイントを見ながら行います。また、振り返りのときに思い出せるように、感想やコメントなどをメモしておきます。



PART2: 会話する (150分–240分)

<ねらい>

このPARTの目的は、二人以上の会話場面で、ある程度まとまりのある会話を組み立てられるようになることです。相手とのインターアクションの中で、情報を交換したり、考えやコメントを言い合ったり、質問と答えをやりとりしたり、経験や感想を共有したりします。

会話の場面は、海外で、日本人や日本語使用者と、日本語を使って話す場面です。街で見かけた日本人に話しかける、海外の友達とスカイプでお互いの最近の様子を話す、知り合いの日本人に日本旅行の体験を話す、友達と映画を見たあと感想を話し合うなど、海外でも実際にありそうな場面が選ばれています。これらの場面は、海外の学習者へのアンケートにもとづいています。

<進め方と留意点>

このPARTの流れは、最初にモデル会話を聞いて、だいたいの内容を確認したあと、会話に使われている文法や文型、ストラテジー、発音の各要素を、それぞれ練習します。それから、会話全体の構成を確認して、最後にロールプレイを行います。

① Can-do の目標を確認する

学習目標となる Can-do を読んで確認します。

② 会話するまえに

会話の練習のまえに、自分の経験や体験を思い出します。

はじめに、これから練習する会話の準備の質問があります。これまでに同じような場面があったかどうかなど、自分のこれまでの経験や、関連知識などを思い出します。

そのあとに、どこでどんな人が話している会話なのかについての簡単な説明文と、顔のイラストが描かれた会話の登場人物の説明がありますので、これを見て確認します。とくに、登場人物のうち誰が日本語学習者の立場で話しているのか、会話相手とはどんな関係なのか(友人、同僚、知り合い、他人同士等)、登場人物の年齢はどのぐらいか、互いに年齢差はあるか、会話場面はどのぐらいフォーマル／インフォーマルなのか(会社、街、友人同士の集まり等)、などについて注目させてください。

③ 会話の内容を理解する (→ 1)

スクリプトを見ないでモデル会話を聞いて会話の詳しい内容を理解します。

はじめに、スクリプトを見ないで、モデル会話を通して聞きます。内容に関する質問が二つありますので、この点に注意して聞くようにします。ここでの目的は、会話の詳しい内容を理解することですので、質問にあまり厳密に答えようとする必要はありませんし、会話の内容を細部まで理解する必要もありません。何回聞かせるかは、教室の反応を見ながら判断してください。たとえば、①はじめに全体を通して聞き、詳しい内容を理解する、②次に、質問の点に注意しながら聞く、という聞き方が一般的なやり方ですが、複数回聞かせることもできます。一人の人がすべてわかるまで聞かせるのではなく、クラスでわかったことをシェアして、そのあとで確認のためにもう一度通して聞く、などの方法もあるでしょう。質問の答えを確認するときは、日本語で行っても、学習者の母語や共通語で行ってもかまいません。

④ ことばの形式に注目する (→ 2)

スクリプトを見ながら会話を聞いて、このトピックで練習する文法や文型に注目します。丁寧体と普通体など、ことばのスタイルに注目することもあります。

次に、スクリプトを見ながら会話を聞きます。このとき、会話を聞きながら、()の中にことばを記入させるようにします。この()の中には、次の「会話で役立つ文法・文型」で取り上げる言語形式が入るようになっています。ここでの目的は、これから勉強する文法・文型の形式を意識化することにありますので、ある程度わかった段階で、クラスで答え合わせをしてください。

()の中に形を書き入れたら、その部分にどんな意味や働きがあるか、前後の文脈を見ながら考えます。これを日本語で説明することは難しいと思いますので、学習者の母語や共通語を使ってかまいません。

トピックによっては、会話のスタイルの違いについて考える設問がある場合もあります。登場人物が普通体と丁寧体のどちらを使っているか、その使い分けの理由は何かを考えながら、スタイルの違いを意識します。「中級」からは、友達同士のインフォーマルな会話スタイルや、敬語を使ったフォーマルなスタイルも、積極的に導入されます。登場人物の親疎や上下関係を考えながら、適宜説明を加えてください。

⑤ 会話に役立つ文法・文型 (→ 3)

会話の場面で Can-do を達成するために役立つ文法や文型を取り上げて練習します。トピックと関連した、意味のある文脈で練習します。

会話の場面で Can-do を達成するために役立つと思われる文法・文型を練習します。はじめに、会話の中での機能と、それに使う表現形式がまとめられていますので、それぞれがどんな場面でのように使われていたか、**2** で考えたことと合わせて確認します。これらの項目のうち、「初中級」までに取り上げられていない新出項目には**1****2**などの番号がつけられており、練習問題が用意されています。既出の項目に関しては、『まるごと』の参照先が書かれていますので、必要に応じて復習してください。

文法項目ごとの練習は、はじめに形式を確認したあと、場面を考えて練習をします。練習問題は、形を変える練習、聞いて選ぶ練習などいろいろありますが、すべてトピックに関連した意味のある場面で、Can-do に結びつくような文を作ったり理解したりする練習になっています。

チェック音がある練習は、各自で問題を解かせたあと、音声を通して解答をチェックさせるという使い方を想定していますが、教師が答え合わせをしたあと、音声に合わせてリピートしてみる、シャドーイングしてみるなどの使い方もできるでしょう。

この部分で大切なのは、ここで取り上げる「文法・文型」は、その知識を身につけること自体が学習目標なのではなく、あくまでも学習目標は「Can-do ができるようになること」であって、それを支えるための要素として「文法・文型」がある、という立場です。たとえば学習項目として「尊敬語」を学ぶ場合にも、「尊敬語を身につけるために、この PART を学習する」のではなく、「知らない人に話しかけていろいろな話をするために、尊敬語を学習する」ということに留意してください。クラスによっては、文法項目をより定着させるため、練習問題を補うこともあると思いますが、ただ形を練習するために、トピックにも Can-do にも関係ないことばを使って練習したり、まったく関係ない場面を示して例文を作らせたりすることは、あまり好ましくないと考えます。とくに、ある文型の、機能の異なる用法をすべて挙げたり、類似表現との違いについて教師が一人で詳細に説明したりするなど、この部分にあまり時間をかけすぎないようにしてください。

言語知識重視の学習者は、「文法を勉強する時間が少ない」のような不満を持つ可能性もありますが、この教材の目指すものはあくまでも「実際のコミュニケーション」であって、文法の詳細な知識を身につけることではない、ということを理解してもらう必要があるかもしれません。このあたりはコースの案内文や、授業前のオリエンテーションなどであらかじめ学習者に明確に説明しておく、うまくいく場合が多いようです。

同時に、文法の詳細は自分だけでも学習可能であるので、学習者の興味によって適当な文法の参考書などを紹介するとよいでしょう。

⑥ 話すためのストラテジー (→ 4)

わからないことばがあっても会話を止めないで話し続けられるように、言い換えや質問をしたり、会話をうまく進めるために、あいづち、確認、前置きなどをしたりするストラテジーを練習します。

B1 レベルというのはある程度まとまりのある話ができるレベルですが、自分の言いたいことをすべてスムーズに言い表せるかと考えると、まだその日本語レベルは限られているといえます。このレベルの限られた日本語で会話を進めていくためには、言えないことばをほかのことばで言い換えたり、相手の言ったことを確認しながら話したりするなど、さまざまなストラテジーを使って、日本語力を補いながら話すことが有効です。ストラテジーは、PART 1「聞いてわかる」でも PART 4「読んでわかる」でもそれぞれ練習しますが、ここでは会話の中で使うと効果的な、会話のためのストラテジーを意識化し、練習します。

はじめに、モデル会話の中で使われていたストラテジーを一つ取り上げ、注目します。本文中でそのストラテジーがどのように使われていたかを確認したあと、その他の例も見てみます。これらのあと、自分で使ってみる練習をします。

トピックによって取り上げるストラテジーの種類が違い、練習量も違いますので、適宜時間を調節してください。

⑦ 発音の練習 (→ 発音)

コミュニケーションがよりスムーズにできるように、できるだけ自然で聞きやすい発音を目指します。文全体のイントネーションやリズムなど、韻律を中心に取り上げます。

アクセントやイントネーション、リズムなどの韻律を中心に、できるだけ自然な発音ができるようになるための練習をします。このレベルでは、相手がなんとか理解できるレベルではなく、相手にとって聞きやすい発音で話すことが目標となります。

はじめに質問の文を読んで、そこに示された観点から音声を聞き、自分で考えます。そのあとで説明を読んで理解したあと、それに注意しながら発音する練習をします。

日本語では単語のアクセントが文の韻律のもとになっていますので、このコーナーではそれぞれの単語にアクセントの印が書かれています。この教材では、「入門」からの方式と同じように、アクセントの下がり目(アクセント核)を「**˩**」で示し、また単語にアクセントの下がり目(アクセント核)がないとき(平板型)は、単語の最後に「**˩**」を付けて示してあります。なお、「発音」コーナーの部分以外に出てくる単語については、まるごとサイトからダウンロードできる語彙表に、すべての単語にアクセントの記号が振られています。単語のアクセントを確認するのに使ってください。

目標は、日本語のアクセントを意識化し、リズムやイントネーションに気をつけながら、文全体で自然な発音ができるようになることです。ここでは、正しく発音できるようになるまで何度も直したり、くり

返させたりする必要はありません。どちらかというと、長い目で自然な発音を身につけていくことを目指してください。一つひとつの単語のアクセントにこだわるよりも、文全体で自然な発音になるように意識しましょう。また、アクセントがあまり得意ではなかったり、これまでアクセントについてあまり意識してこなかったりした先生は、ここで学習者と一緒に練習するような気持ちで行ってみるといいでしょう。

⑧ ロールプレイ (→ 5)

この PART のゴールとなる練習です。はじめに会話の構成や表現を確認します。そのあとで、いくつかの場面でロールプレイをして、実際の場面で会話の Can-do が達成できるようにします。

場面と目的が与えられたときに、これに合ったセリフをその場で即興で考えて、相手の反応に応じて会話を続けることが目標です。このロールプレイによって、実際の場面で話す状況に近い練習をして、教室外での実際の会話につなげることができるようになります。このロールプレイは Can-do の達成に直接結びつく練習であり、決して「付け足し」や「時間が余ったらやる」練習ではありません。むしろ、この練習をするために、これまでの部分があったのだ、という認識で必ず行うようにしてください。

はじめの(1)では、モデル会話の構成を考える設問があります。会話全体がどのように組み立てられているかを意識して、自分がまとまりのある会話を作るときの参考にします。話者の両方の発話に注目する場合と、一方の話者の発話のみに注目する場合とがあり、誰の発話に注目するかがイラストの顔によって示されています。

(2)のロールプレイでは、複数のロールプレイを段階的に行います。はじめに、自由度の低いロールプレイを行います。ここでは、会話本文に出てきた内容を思い出しながら話します。またこの段階でのタスクは、与えられたロールプレイの(例)の続きを考えるというものになっています。ここでは話者はまだ、自分の言いたい「本当のこと」をいう段階ではありません。練習として、これまで得た情報から、フィクションの話を作りながらロールプレイをします。

ロールプレイの(例)には学習者同士が話すサンプルが用意しており、音声を聞くことができます。ただし、これは「正解」ではなく、だいたいこのような感じでやればいいのか、というものとして考えてください。

この練習のあとで、より自分の言いたいことが言える、自由度の高いロールプレイへと発展させます。最後のロールプレイが、おそらく自分がもし実際の場面で話すならこんな会話をするだろうという内容になっています。この PART の最終的な練習として、楽しみながら行ってください。

ロールプレイをするにあたっては、文法や文型、ストラテジー、発音、会話の構成など、この PART で勉強したことを意識しながら行ってみるようにします。ただし、Can-do が達成できれば、**3** や **4** で練習した文型やストラテジーを無理に使わせたりする必要はありません。これらの文法・文型やストラテジーを使えば、その場面の Can-do がよりスムーズに達成できるのだ、という位置づけに

なっています。

ロールプレイはペアで行いますが、相手を次々に変えて、いろいろな人と何回か行うようにすると、たくさん練習ができてよいでしょう。

トピックによっては、最後に「文化」の質問がある場合もあります。モデル会話に現れた文化的な側面について、日本と自国を比較し、似ている点や違う点を話し合いながら、その背景を考えます。

⑨ Can-do ができたかチェックする

巻末の「学習記録シート」に、Can-do の達成度を 3 段階(☆☆☆)で自己評価します。自己評価にあたっては、質問形式になっている評価ポイントを見ながら行います。また、振り返りのときに思い出せるように、感想やコメントなどをメモしておきます。



PART 3: 長く話す (120–150分)

<ねらい>

この PART の目的は、自分の言いたいことを、自分のことばで、ある程度長く続けて話せるようになることです。長く話す練習と聞くと、プレゼンテーションやスピーチなどの活動を思い浮かべがちですが、これらの活動は教室活動としては意味があっても、実際の場面での言語使用を考えると、必要な機会はそれほど多くないでしょう。そこで、この教材では、学習者にとってより身近だと思われる日常の会話の中で、少しくわしい話ができるようになることを目標にしています。自分の好きな音楽や映画の魅力、旅行の計画について話したり、自国の食べ物やスポーツ、行事や歴史などについて情報提供したり、最近のできごとやニュースについて話したりなど、一人でまとまった話ができるようになることを目指します。とくに、海外では日本人と接する機会を見つけて、自分の体験や感想などが伝えられたり、自分がよく知っていることがらについて情報提供ができたりすれば、交流が深まってくると考え、場面や話題を選んであります。

B1 レベルでまとまりのある話ができるようになるためには、談話構成に注意することと、できごとの関係がわかるように基本的な接続詞や指示詞が適切に使えるようになることも必要です。これらについても、学習項目になっています。

<進め方と留意点>

この PART では、はじめにモデル会話を聞いて、これから話す内容についてイメージを持ちます。次に、必要な表現形式を確認したあと、会話例のメモを見ながら、聞いた会話の内容を再話します。そして、最後に、自分や自分の国のことについて自由に話します。

① Can-do の目標を確認する

学習目標となる Can-do を読んで確認します。

② 話すまえに

質問に答えて、どんなことを話したいか、自分ができるようになりたいことをイメージします。

質問をヒントに、これから話す内容についてイメージを膨らませます。ここでは、上手に話す必要はありません。わからないことばなどは、母語や共通語を使ってもかまいませんので、こんなことが話せるといいかについて、クラスで自由に話し合います。

③ モデル会話を聞く (→ 1)

達成目標となる会話例を聞き、どんな内容をどんな順番で話しているか整理します。

まず、写真、人物のイラストと吹き出しの中の会話を見て、どんな場面で、誰と誰が、何について話しているかを確認します。どのトピックも、イラスト左側の聞き手が質問し、イラスト右側の話し手(外国人)がそれに答えているという設定です。この話し手の発話が、学習者の Can-do の達成モデルになっています。

次に、モデル会話を聞いて、話し手がどんなことを話しているかを確認します。教科書の設問を読んで、理解のポイントをクラスで確かめてから聞かせます。ここでの目的は、話のほしいの内容を理解で、設問に正確に答えることではありませんから、巻末の解答例は参考程度にしてください。また、わからないことばの意味などは、教師が適宜説明してください。

④ 表現の確認 (→ 2)

会話例の中で使われている表現の中で、Can-do 目標を達成するために必要な表現を確認します。

モデル会話の中から、話すときに役立つような表現を取り出して、機能別にまとめであります。注目してほしいところを空所にしてありますから、全体にざっと目を通し、空所の箇所を確認してから、聞かせます。学習者によっては、聞かなくても()に入ることばを予想できる場合もあるので、その場合は、先に記入させてもいいでしょう。

空所を埋めさせるときは、取り上げた例文が、必ずしも会話に出てくる順に並んでいないこと(機能別にまとめたため)に注意してください。何回か聞かせてもいいですが、目的は言語形式への注意を促すことで、ディクテーション練習ではないので、聞き取りにくい箇所などは、わかった学習者に言わせたり、教師が答えを確認したりして、あまり時間をかけすぎないようにします。

空所が埋められたら、意味と形と使い方を確認します。このとき、学習者にわかりやすいようにほかの例文などをあげたり、簡単な練習を加えたりしてもいいでしょう。ただし、文脈から逸脱した練習は避け、授業全体の時間配分に注意してください。

⑤ モデル会話の確認とシャドーイング (→ 3)

スクリプトを見ながら会話例を聞いて、内容と使われている表現を確認します。なめらかに話せるようになるために、スクリプトの一部をシャドーイングしてみます。

話し手の発話部分だけを編集した音声のスクリプトを見ながら聞き、話の内容、語彙・表現などの言語形式を確認します。言いよどみ(フィラー)や言い差し表現、縮約形など、話しことば特有の言い方、指示詞や接続表現についても、スクリプトを見ながら目と音声の両方で確認します。

内容と言語形式の両方が確認できたら、シャドーイングします。シャドーイングは、聞いたことを、

そのまま、すぐに口に出して言う練習です。ここで、シャドーイングを取り入れてあるのは、主に、発話のなめらかさのトレーニングのためです。はじめは、スクリプトを見ながらでかまいません。何回か繰り返し、最後はスクリプトを見ないでやってみます。はじめてシャドーイングをするときは、難しいと感じる学習者がいるかもしれませんが、だんだん慣れてくるでしょう。

なお、シャドーイングするところには★印が付けてありますが、余裕があれば、ほかの部分についても同じようにやってみてもいいでしょう。

⑥ 再話する (→ 4)

メモを見ながら会話例の内容を思い出し、再話(自分のことばで話してみる)します。談話構成や表現に注意し、まとまりのある話ができるようになるための練習です。

次の5で自分のことを自由に話すまえの準備として、再話という形の練習をします。題材としては聞いて理解したモデル会話を使い、その内容を自分のことばで話してみます。この段階では、話す内容について自分で考える必要はありません。また、暗記している必要もありません。モデル会話の内容を簡単に示したメモを見ながら、自分でことばをつないで話します。ここでの目的は、まとまりのある談話が構成できるようになることです。どのようにことばをつなげばいいのか、適切な言語形式を頭で考えながら話すことが大切です。そして、話したあとで自分の発話をモニターし、2で見た表現が使えたかどうかを振り返ることによって、発話の質を高めていきます。

メモは、話の流れや談話構成が一目でわかるように、何枚かに分けて提示してあります。練習では、まず、話すまえに、メモを見ながら、モデル会話の内容を頭の中で思い出させます。この段階で、3でスクリプトを見ながら聞いたモデル会話を、メモを見ながらもう一度聞かせてもいいでしょう。

メモの内容を、一度に最初から最後まで話すのが難しそうな場合は、メモを1枚ずつ練習して、話す範囲をだんだん広げていくこともできます。また、学習者をグループやペアにして、同じメモを見て順番に話させ、学習者同士でお互いの発話を観察させることによって、表現のバラエティに気づかせることもできます。また、だいたい話せるようになった段階で、3のモデル会話の内容をもう一度聞かせることによって、自分の発話とモデルの発話を比較させ、言語形式の違いに気づかせることも、言語形式の習得を促すための有効な方法です。

最初から最後まで一通り話せるようになったら、聞く相手を変えて話す、時間を決めて話す(だんだん時間を短くする)など、条件を変えて何回か話すことによって、流暢さを高めることができます。トピックによって、練習のさせ方を工夫してください。

⑦ 自分のことを話す (→ 5)

達成目標となる練習です。自分や自分の国のことについて、まとまりのある話をします。話したい内容と流れのメモを作ってから話し、できるだけスムーズに話せるように何回か練習します。

この PART で目指していることは、日常会話のやりとりの中で、ある程度くわしい、まとまりのある話ができるようになることです。身に着けるべき能力は、頭の中で流れを組み立て、ことばを選びながら話していく力です。スピーチやプレゼンテーションとの大きな違いは、事前に原稿を整え、何回も練習して暗記して行くものではないということです。話すまえに原稿を書かないと安心できないという学習者もとどきいるので、練習の目的を事前に説明しておく必要があります。

何について話すかは学習者の自由で、話すまえに「こんなことが話したい」とイメージしたことに関連づけられるといいでしょう。ただし、海外のクラスの場合、クラスの全員が同じもの(たとえば、同じ料理など)を選んでしまうと、お互いに話す活動が退屈になる恐れがあります。そのような場合は、誰が何について話すかを、ある程度教師がコントロールした方がいいでしょう。

次に、話すまえにメモの作成を行います。メモは頭の中で流れを組み立ておくための助けであって、事前に原稿を書くことではないということに十分に注意してください。メモは、談話の流れを意識させるために、4 と同じ構成になっています。学習者が話したい内容によっては、ほかの構成でメモを作らせてもかまいませんが、構成を考える習慣をつけさせてください。話のアウトラインを考えるとときは母語でメモさせてもかまいませんが、話すときに必要な情報、語彙や表現などは、辞書やインターネットなどで調べさせます。クラスメートと相談したり、教師が必要に応じて教えたりしてもいいでしょう。

話す内容の準備ができたら、ペアやグループで、メモを見ながら自由に話します。練習なので、メモを見てもかまいませんが、なるべくメモの話の流れを頭に入れて、相手を見て話させるようにします。聞き手役の学習者は、あいづちを打ったり、わからないことばがあったら聞き返したりすると、より実際のコミュニケーションに近くなります。学習者同士で、相手を変えて何回か話すようにし、メモを見なくても話せるようになることが最終ゴールと言えます。最終ゴールといっても、B1 レベルでは、文法を間違えたり、すぐにことばが出てこなかったりすることがよくあります。1箇所も間違えずに暗記して話すのではなく、間違えたときには言い直したり、ことばが思い出せないときは言いよみを使って時間をかせいだりすることも必要で、ここの練習では、そうしたことも意識させてください。

⑧ Can-do ができたかチェックする

巻末の「学習記録シート」に、Can-do の達成度を3段階(☆☆☆)で自己評価します。自己評価にあたっては、質問形式になっている評価のポイントを見ながら行います。また、振り返りのときに思い出せるように、感想やコメントなどをメモしておきます。



PART 4: 読んでわかる (90分-120分)

<ねらい>

この PART の目的は、海外の学習者でも目にする可能性のある素材を取り上げ、大切な情報を取ったり、内容をだいたい理解したり、書き手の考えなどを理解したりできるようになることです。ソーシャルネットワークの利用者プロフィール、インターネット上に掲載されている料理レシピや掲示板、身近な出来事をつづったブログ、ロコミサイト、雑誌やコミュニティ誌の記事など、B1 レベルの学習者が興味を持って読めそうな素材を取り上げています。

この PART でも、ほかの PART 同様、学習者がこれらの素材を目にする場面と読む目的を重視しています。つまり、どんな場面で何のために読むのかが不明のまま読解文を取り上げて、教室活動として、それを精読させ、そこで使われている語彙や文型、文法を確認し、表現のバラエティを増やすといった、言語知識優先の読みを行うことはここでの目的ではありません。

読解素材は、オリジナルに書き下ろしたのですが、実際のものの形式に近づけ、そこで使われる自然な表現できるだけ使っています。また、日常生活で接する日本語には普通ルビがありませんから、読解のテキストにもルビをつけてありません。書体も、明朝体やゴシック体など、実際に使われている書体を素材に合わせて採用しており、逆に、教科書でしか見ることのない教科書体は使っていません。

素材の中には、知らないことばや読み方がわからない漢字もあると思いますが、実際に日本語でこのような素材を読むときには、自分自身の背景知識やさまざまな戦略を利用して、読むことが必要になります。一字一句にこだわって、すべてのことばの意味を詳細に理解するような読み方しかできないと、実際の読みに対応できません。最初は戸惑う学習者もいるかもしれませんが、B1レベルは、こうした現実世界での日本語の読みに挑戦する段階であるということを前もってオリエンテーションなどで十分に説明し、積極的に取り組めるように促してください。

<進め方と留意点>

この PART では、素材を読む目的に合わせて、段階的に内容を理解していきます。また、タスク達成に必要な戦略を、タスクと関係づけて練習します。表現や文型、漢字に関しては、読解活動のあとで、取り上げて練習します。ここでは、使えるようになることが目的ではなく、読むために必要な知識を確認、整理することが目的となります。

① Can-do の目標を確認する

学習目標となる Can-do を読んで確認します。

② 読むまえに

自分の体験を思い出したり、タイトルからこれから読む内容を予測したりします。

読解テキストに関連する質問に答え、学習者それぞれの体験を思い出します。そして、本文を読む上で必要な背景知識を活性化します。質問はそのための例なので、学習者の背景を考えて、教師が工夫して調節してもかまいません。

③ 内容を理解する(→ 1)

素材の種類に合わせて、主要な内容を理解したり、大切な情報を読み取ったりします。はじめに全体を理解したあとで、少しくわしい内容にも注目します。

ここでは、素材に合わせて実際の場面に近い読み方をします。実際の読み方に近づけるために、最初に読む目的をはっきりさせます。素材によって読む目的、読み方が違いますので、読解タスクの内容は、それを反映したものになっています。たとえば、注目したい点を決めてそれについてどう書かれているか読む、内容をある程度予想してから読む、出来事と書き手の感想やコメントを読む、いくつかの事柄を比較しながら読むなどがあります。また、共通して言えることとして、質問は、全体的な内容理解を問うものから細部の理解を問うものへと、段階的に理解が進むようになっています。

読解において、学習者にストラテジーの使用を促し、実際の読みに近づけるために、まず、質問の答えを考えてみることに挑戦させてください。本文を詳細に一字一句訳して理解しないと気が済まないタイプの学習者の場合、初めは戸惑いを示すかもしれませんが、正答を得ることが重要なのではなく、何を手がかりにしてそう判断するのかという、読解のプロセスを身につけることが大切です。そのためには、各質問の答えをペアやグループで考えさせて、お互いになぜそう考えたのかを話し合わせるといいでしょう。また、教師が答えを引き出す際も、「どうして？ どこを読んでそうだった？ 多分そうだったのはなぜ？」などの質問を投げかけ、学習者に考える機会を与えてください。決して、間違ふことを否定しないようにする教師の態度も大切です。

また、読解においても聴解同様、タスクに答えられたら Can-do 達成であり、わからない箇所が残っても問題はありません。

なお、本文を読み上げた音声ファイルが、まるごとサイトから入手できます。漢字の読み方などの確認が必要な場合は利用してください。ただし、授業での目的は、読めない漢字があっても意味を考えて読み、文章全体から必要なことを理解することですので、漢字の読み方の確認は読解が終わってから行うようにしてください。また、テキストの内容を細部にわたって確認したいという学習者のために、語彙表とテキストの翻訳(ダウンロード可)があります。これらの活動は、学習者の自習に任せるといいでしょう。

④ 読むためのストラテジー (→ 2)

タイトルや見出しなどから内容を予測したり、漢字や文脈などからことばの意味を推測したり、テキスト構成に注目したりするストラテジーを練習します。

1 の読解活動において役に立ちそうなラテジーを、タスクに合わせて一つずつ取り上げます。ストラテジーにはいろいろな種類があり、実際の読解では、一つだけではなく複数のストラテジーを組み合わせて使っています。とくに、わからない語彙や表現がある中でトップダウン的な理解をすすめるとき、複数のストラテジーを使える読み手は、ストラテジーのバラエティが少ない読み手に比べて、内容理解において優れているという傾向があります。また、学習者によっては、習わなくても自然にこれらのストラテジーを身につけ、無意識に使用している場合もあるでしょう。

ここで読解ストラテジーを一つずつ取り上げる目的は、ストラテジーの意識化です。自分が無意識に使っていたものも含め、さまざまなストラテジーの存在に一つずつ注意を向けさせ、試させることで、使えるストラテジーの幅を広げます。ここは、練習の場です。ですから、ここで選ばれているストラテジーを使っただけでは成功しない場合もあっても、それをすぐに失敗だ、ストラテジーの使用は意味がないと結論づけないようにしてください。ストラテジーの学習が進んでいく中で、使えるストラテジーの種類が増え、読解がよりスムーズに進んでいくようになるはずです。

どんなにストラテジーを強調しても、わからないことばのすべてが気になり、読むときに辞書が手放せないという学習者もいます。辞書をひくこともストラテジーのひとつですが、一字一句すべてを辞書に頼ったのでは、実際の場面で必要な読むスピードに対応できないでしょう。このような学習者にとっては、キーワードだけを辞書でひいたり、辞書をひく以外のストラテジーを知ったりすることは、読みの可能性を広げることにつながると考えられます。

この教材では、ストラテジーを使った読解のプロセスが、読解文の一部を使って具体的に示してあります。教科書で取り上げられている例を読むことによって、学習者はストラテジーの使用プロセスが追体験できます。トピックによっては、そのストラテジーを使う練習がある場合もあります。練習は、ペアやグループで行い、学習者同士で話し合うことで、アイディアの交換ができるといいでしょう。

⑤ 読んだあとで (→ 3)

読んだ内容についての自分の体験や考え、類似の事例などについて話し合い、理解を深めます。

読んだ内容について、同じような経験をしたことがあるか、自分だったらどうするか、自分はどう感じたかなど、自分自身の経験や考えを話します。ペアワークなどを利用して、積極的に発言させるようにしてください。

トピックによっては、本文に関連する「文化」の質問があります。自分自身や自分の国の場合について、ときには書いてある内容と比較するなどして、考えてみてください。

⑥ 読むのに役立つ文法・文型 (→ 4)

テキストの内容を理解したあとで、文法や表現に注目して、意味と形、使い方を確認します。

読解で扱った素材の中から、『まるごと』初中級までに扱われなかった文法・文型を取り上げ、意味・機能の見出しをつけ、整理してあります。それぞれの意味・用法についてのくわしい説明は教科書にはありませんが、『教え方の手引き 第2部 トピック別の教え方と留意点』に教師向けの参考情報として載せてあるので、教えるときの参考にしてください。

クラスでは、取り上げた文法・文型の意味や使い方を、例文を見ながら確認します。例文によっては、一部分が空所になっているものもあります。そこに入ることばを学習者が考えることによって、ここで取り上げた文法・文型の意味や使い方をより深く考えることができるようになっています。

学習者の理解を促進するために、適当な例文を加えたり、練習を工夫したりしてもかまいません。ただし、中級でとりあげる文型や表現は、文脈を離れる理解が難しく、短文レベルでの練習はあまり効果がない場合が多いです。ここでの説明や練習は簡潔にし、ほかのテキストを読むときに出てきたものを確認するなど、常に、文脈の中で文法・文型を扱っていくことを重視してください。

漢字の整理 (→ 漢字のことば)

テキストにある漢字のことばの読み方と意味を確認します。また、漢字を手がかりに、ことばを増やしたり整理したりします。

本文の中から漢字のことばを取り上げて、読み方と意味を確認します。取り上げる漢字は、『まるごと初中級』までに扱われなかった漢字です。ここでは、手書きで漢字が正確に書けるようになることを目的としていません。キーボードで入力して、正しく漢字に変換できれば十分だと考えています。そのため、漢字も、手書きの見本として使われる教科書体は使用していません。

練習では、教室内にキーボードを使う環境がない場合は、スマートフォンで入力したり、宿題として家でやってくるようにしたりしてもいいでしょう。また、学習者のニーズによっては、手書きの練習をしてもかまいません。

◆漢字を手がかりにことばを増やしたり整理したりする

いろいろな手がかりを使って漢字のことばを増やしたり整理したりします。漢字の意味や形、組み合わせ、品詞など、さまざまなルールや類似点などへの「気づき」を促し、自律的に漢字のことばを分類したり、学習したりするヒントが得られることを目指しています。

⑦ Can-do ができたかチェックする

巻末の「学習記録シート」に、Can-do の達成度を 3 段階(☆☆☆)で自己評価します。自己評価にあたっては、質問形式になっている評価のポイントを見ながら行います。また、振り返りのときに思い出せるように、感想やコメントなどをメモしておきます。



PART5: 書く (30分-60分)

<ねらい>

身近で個人的に関心のある話題について、ある程度まとまりのある文章が書けるようになることが目的です。ソーシャルネットワークやメールなど、海外でも日本語で書く可能性のある具体的な場面、状況を想定しています。比較的単純な文をつないで、ややくわしい内容や、感想、コメントなども書けるようになることを目指します。

書く内容は、トピックごとに、いろいろな場面での「書く」行為を想定しています。この教材での「書く」は、日本語学習の場で広く一般的に行われている、いわゆる「作文」活動とは異なるものです。「作文」では、テーマを決めて、学習者が自分の経験や意見などを書きますが、そこには「どんな場面で」「誰に対して」「何のために」書くのかというのは想定されていません。それに対して、ここで練習する「書く」は、学習者が海外であっても実際の生活の中で書く可能性のある場面や目的を題材としていますので、そこには「どんな場面で」「誰に対して」「何のために」が明確に想定されています。この PART では、こうした「書く」コミュニケーションの場面や目的を考えながら書き、これを実際の場面に生かせるようになることが目標になります。

なお、実際の生活においては、住所や名前など決まったもの以外で何かを手書きすることが必要な場面はもう少なくなっていることから、この教科書では手書きを求めています。代わりに、コンピュータやスマホなどで入力することを前提にしています。ただし、そのことは「手書き」自体を否定しているわけではありませんので、学習者の必要性や興味を考えながら、各現場の状況に合わせて方針を決めてください。

トピックによっては、内容が PART4「読んでわかる」と直接関係している場合もあります。その場合でも、「書く」では、独立した Can-do を達成することが目的ですから、PART4「読んでわかる」で学習した文法や文型を無理に使わせようとする必要はありません。あくまでも Can-do が達成できたかどうかを意識するようにしてください。

<進め方と留意点>

短い PART ですので、あまり流れは気にする必要がないかもしれません。はじめに「どんな場面で何のために誰に対して書くのか」を意識させます。次に、書く内容を整理したり、モデル文を見たりします。そのあとで実際に「書く」活動を行い、書いた成果をクラス内で共有します。

① Can-do の目標を確認する

学習目標となる Can-do を読んで確認します。

② 書くための準備 (→ 1 (1))

書く内容を整理したり、モデルを見て参考にしたりします。

質問に答えて書く内容を整理したり、書くモデルを見て参考にしたりします。モデル文がある場合、その文を読み上げた音声ファイルをまるごとサイトから入手することができます。読み方の確認が必要な場合は、利用してください。

③ 書く (→ 1 (2))

目的と場面にあった文章を、実際に自分で書いてみます。この部分のフォームは、コンピュータで入力できる PDF ファイルが、サイトからダウンロードできます。書いたものはポートフォリオに入れておきます。

準備のあと、自分で文を書いてみます。実際の場面や目的を考えながら、本当にその場面で書いているつもりになって書かせるようにしてください。まるごとサイトから、学習者が入力することが可能な書く活動のシート(フォーム付きの PDF ファイル)をダウンロードすることができますので、必要に応じて利用してください。授業時間を使って書かせる場合は、手書きさせてもいいでしょうし、各自の PC やスマホで入力させることもできます。また「書く」作業自体は宿題として家で行わせる場合もあるかもしれません。それぞれの現場の環境に合わせて行ってください。

書いたもののフィードバックは、教師が見て添削するだけでなく、ピア活動として学習者同士で添削させたり、「Lang8」などの作文添削サイトにアップロードさせて添削を各自で受けさせたりする方法もあります。このようなフィードバックは④「書いたあとで」のあとに行う場合もあります。

④ 書いたあとで (→ 2)

読み手の立場に立ってクラスのほかの人が書いたものを読んで、コメントしたり、返事を考えたりします。

書いたあとの活動として、学習者同士、お互いが書いたものを交換して読み合います。そのあと、お互いに読んだものについてコメントしたり、返事を考えたりします。

ここでは日本語の表現などをピアで添削させるのが目的ではなく、書かれたものを「読み手」の立場に立って読んで感想などを述べることで、「書く」-「読む」というコミュニケーションの中で、成果物を見てみるのが目的です。

⑤ Can-do ができたかチェックする

巻末の「学習記録シート」に、Can-do の達成度を 3 段階(☆☆☆)で自己評価します。自己評価にあたっては、質問形式になっている評価ポイントを見ながら行います。また、振り返りのときに思い出せるように、感想やコメントなどをメモしておきます。

◎ 教室の外へ（授業時間外）

<ねらい>

教室の中での学習を、教室の外にある実際のコミュニケーション場面へとつなげるのが目的です。それぞれのトピックについて、教科書に書いてあることを学ぶだけではなく、教室外においても学習者自らが主体的に活動することで、知識や経験を深めます。

自分に必要な表現を考えてまとめたり、インターネットなどを使って関連項目をよりくわしく調べたり、学習した日本語を教室の外で使ったりして、自分から積極的に、知識や経験を増やします。自国における関連イベントを実際に体験したりする方法の例も示されています。

ここでやってみたことは、「学習記録シート」に書いて、資料といっしょにポートフォリオに入れておきます。

<進め方と留意点>

「教室の外へ」は各トピックの最後のページにあります。PART1-5 をすべて終えてから行うわけではありません。また、それぞれの活動も、数字の順番に行う必要もありません。授業の内容に合わせてしながら、自由に行ってください。

また学習者が個人的に授業時間外に行くことを想定していますが、クラスの授業に取り入れることもできるでしょう。

① わたしだけのフレーズ

自分だけの表現をまとめてメモします。教材には出てこなかったけれども、自分が本当に言いたいことを言うようになるために必要な、表現を補います。

授業では習わなかったけれど、自分に必要となるであろう表現を、書きとめておくコーナーです。外国語を学習するとき、「このトピックのこういう場面だったら、自分ならこういうことを言いたい」というフレーズが、必ずいくつかあるものです。これらのフレーズは、自分のことを説明する表現であったり、自分の興味や要求を伝える表現であったりしますが、多くの場合、個別で、ほかの学習者にはあまり関係ないものです。こうした個人によって異なる必要フレーズを、各自でまとめておけば、実際のコミュニケーション場面で、「本当に言いたいこと」を言うための助けになるでしょう。

学習者には、トピックと関連した、具体的な言語使用の場面を想像させます。そこで、自分だったらどんなことを言いたいのか、具体的に考えます。はじめは学習者の母語で考えてもかまいません。そのあとで、それを日本語ではどのように言えばいいか、自分で考えたり、辞書を引いたり、翻訳ソ

フトで訳したりしながら日本語にして、書きとめておきます。この際、授業の内外で教師がチェックして、不自然な表現を直すことができれば理想でしょう。

ここで書く「わたしだけのフレーズ」は、必ずしも B1 レベルのまとまりのあるものでなくてもかまいません。ときには単語レベルであっても、自分に必要なことを言うためのものであれば、自由に書きとめておくといいいでしょう。

こうして考えたフレーズは、本冊に直接書き込んでもいいですし、「学習記録シート」にも欄がありますので、そこに記入してポートフォリオに入れておけば、あとで振り返りがしやすいでしょう。

② 教室の外の活動のアイデア

トピックに関係があることを、インターネットで調べたり、SNS や地域の日本語コミュニティで日本語を使ってみたり、日本関係のイベントなどで実際に日本文化を体験したりします。

教科書に出てきた事項について、よりくわしく調べたり、関連するサイトを見たりします。ここでの目的は、学習者がトピックに関する知識を深めることだけでなく、授業を離れても、主体的に日本の情報にアクセスし、知識や情報を得ることができるようになること、また自国で日本に関連するさまざまなものに積極的にアプローチし、体験しようとする姿勢を身につけることにあります。

また、日本文化関連のイベントに参加したり、実際に身近な日本人と話してみたり、SNS や日本人コミュニティで日本語を使ってみるためのアイデアも載せています。教室で習ったことを、トピックと関連づけながら教室の外で使ってみることで、実際にコミュニケーションに繋がっていきます。

基本的には授業時間外に学習者が家などで行うことを想定していますが、その方法はいくつかあるでしょう。現場の状況に合わせて適宜行ってください。

例 1: 学習者が家で自由に行くことを前提とし、報告とフィードバックは「テストと振り返り」の時間の「振り返り」のときにまとめて行う。

例 2: 学習者が家で自由に行くことを前提とし、次の授業の最初にクラスで簡単な報告をしてもらい、適宜フィードバックを行う。

例 3: 課題のいくつかを、教室の中で時間を取って行う(教室で映像を見る、グループで何かを作成する、など)。

③ 日本語・日本文化の体験記録を書く

トピックに関連することで、実際に自分でやってみたこと、体験したことを、「学習記録シート」に書いておきます。

「学習記録シート」には、

1. 教室の中でみんなで体験したこと
2. 教室外で「教室の外へ」を参考にやってみたこと

3. それ以外に自分でやってみたこと

の3つの欄があります。この「教室の外へ」に載っているアイデアをやってみた場合には 2. に記入します。

なお、1. には、たとえば授業時間内やセンターの行事として行った料理体験や、ビジターセッションで日本人にインタビューしたことなどについて、書かせるようにします。3. では自分が興味を持って調べたこと、見てみたサイト、また日本に実際に行ったときに経験したことなどを自由に書かせてください。1-3 の分類は、いろいろな可能性があるということを示すことが目的なので、ある経験がどれに当たるかを厳密に分類することは大切ではありません。

「振り返り」のセッションで、ここに書いたことを振り返ることで、これまでの自分の学習を考えたり、クラスの人と体験を共有したりします。